

gakugei@nnc.co.jp

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の植松聖被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家と詩人の辺見庸さんに聞いた。

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても許されない」といった言わすもがな前提が私たちの内面ととくに破壊していたことを、あらわにしたからです。

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を差別する。植松被告、私は「ぞとくん」と呼びますが、彼はそこの論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に同法は「ぞとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならぬ」と考える「園」の職員「ぞとくん」と目が

隠された優生思想の表出

死刑は被告と同じ論理

作家、詩人
辺見庸さん



辺見庸さん

見えず奉行ができます、しかし自由に行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を多々、見ないようになっている人々、忘れようとしている人々を、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉はたくさんあります。それはおためかしというものです。

▽偽善
意志とは関係なく「在ってしまう」という美存在について、私のおぼろげな「そこにあるもの」を引受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。

けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を多々、見ないようになっている人々、忘れようとしている人々を、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉はたくさんあります。それはおためかしというものです。

▽本音
都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい。えたいの知れないそんな「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太くいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、

へんみ・よう 1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「ぞとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だ、どうせに扱えば扱えば、事件の真相からは離れていく。

「ぞとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではない。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではない。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にびたりと同調していた。

「ぞとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を、「そこではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要だ。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳さが問われることで

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

インタビュー

相模原殺傷事件判決

見聞録

白鳥 敬

2011年の東京電力福島第1原発事故の後、注目を集めた風力や太陽光などの再生可能エネルギーがコストの高さなどからそれほど浸透しない中、核融合発電の研究が新たな段階に入ってきた。

日米欧などが共同で開発中の国際熱核融合実験炉ITER

R(フランス)の建設が本格を迎え、1月にはITERの主要部品で日本が担当する超電導コイルが完成。25年の運転開始を目指す。

核融合発電が新段階

コスト、安定性など課題

核融合とは、軽い元素の原子核が融合して別の元素に変換する。核融合発電では、水素の同位体の重水素と三重

重水素を制御し連鎖反応をゆっくりに行う。しかし、連鎖反応を制御できなくなると福島原発の事故のように暴走する。対して核融合炉は、燃料の供給が止まれば停止する。これが原発よりも安全とされる理由だ。また原発のような高レベルの放射性廃棄物を出すこともない。燃料の重水素と三重水素は、海水や炉内から得られるという。

ただ核融合で生成された中



◆大阪文学学校
が春期生募集
作家の田辺聖子さんや朝井まかてさんらを輩出したことでも知られる大阪文学学校(大阪府大阪市中央区・細見和之校長)が2020年度春期生を募集している。定員は昼間部と夜間部が各30人、通信教育部が40人。それぞれ小説と、詩・エッセーのクラスがあり、通信教育部にはエッセー・ノンフィクションのクラスが加わる。

講師は作家の葉山郁生さんや詩人中塚鞠子さんら。年間学費は12万9千円で、4月1日時点で25歳以下の受講者と、岩手、宮城、福島3県在住の受講者は10万円に減額する。4月12日の入学開講式まで募集。問い合わせは同校、電話06(6768) 6195。

妖怪、戦争、そして人間

詩誌『菱』20号に寄せて

沖繩ならではの音楽作り

指揮者の大友直人

22歳でNHK交響楽団を指揮しデビューして以来、日本に根を下して活動してきた。琉響は、沖縄身でN響の首席トランペット奏者を務めた故祖父方正が創立。祖望の琉の演奏家が安心して活動できる環境を整えたい」との思いに共鳴し当初からミュージックアドバイザーとして支え、祖望の死去後、16年から音楽監督を担う。

「音楽への純粋さ、培ってきたノウハウは確固としたものがある。財政難を抱えながら奮闘する楽団員を目の当たりにしてきただけに、思い入れはひとしおだ。



「新作を演奏するのが大好き。心から共感して、夢中になって演奏した楽曲は、お客さまにも届くと大友直人

日本での公演に先立ち昨年11月、ルーツで現地のオーケストラと新曲第2、3楽章を演奏した。沖で生まれたアーティストは、聴き手を大いに魅かたぞうだ。